

〈 富山から消えた動物 2 〉

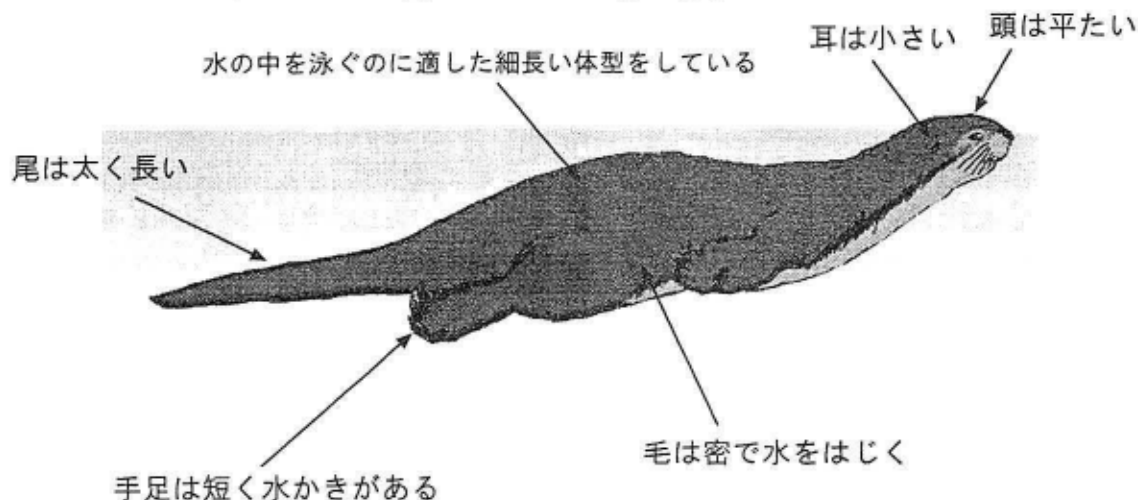
カワウソ

カッパのモデルはカワウソともいわれるように、カワウソは日本の水辺の代表的な動物でした。今では富山はもちろん日本国内ではほとんど見みられません。

カワウソはどんな動物？

カワウソはイタチ科の哺乳類で、体長 70 cm、尾をいれると 1m を越し、体重は 8 kg にもなります。タヌキは体長 50 cm、体重 3~5 kg ですから、タヌキの 2 倍ほどの体重がある大きな動物です。体が大きいわりには頭が小さく、手足が短かく指には水かきがあり、泳ぐのに適した体型です（図 1）。日本各地の川や海岸にすみ、カニや魚を食べて生活していました。

図 1 カワウソの体の特徴



富山県にはいつごろまでいた？

トキ、コウノトリ、オオカミ、カワウソなど、今では全国で見られなくなった動物も江戸時代の中頃までさかのぼるとどれも越中にすんでいました。これらの動物も明治時代にはいると乱獲等が原因で全国的に激減あるいは絶滅してしまいました。どの動物も記録が少なく詳しいことはわかりませんが、カワウソは毛皮の生産量の記録が残っています。富山県では多い年で毛皮が 120 枚も生産されていますが、明治の末には 25 枚になっています（図 2）。特に、西砺波郡で毎年生産されていることから、県西部を流れる小矢部川沿いに多くすんでいたと考えられます。明治時代は、小矢部川にもサケやマスがたくさん上ってきてカワウソのエサも豊富だったことでしょう。カワウソ

は1928年（昭和3年）に保護のため全国的に狩猟が禁止になり、北陸地方では、禁止になる前の1923（大正12年）～1927年（昭和2年）の5年間に福井県で8頭、石川県で11頭が捕獲されていますが、富山県では捕獲されていませんので（図3）、この頃には富山県にはほとんどいなくなっていたと思われます。

現在の日本ではほとんどいなくなったカワウソ

カワウソは良質な毛皮をとるため明治時代から日本各地で乱獲され激減しました。狩猟が禁止になる前の5年間（1923年～1927年）には全国で300頭あまり捕獲され（図3）、この頃は少ないながらも全国の水辺にすんでいました。本州のカワウソは、1954年の和歌山県を最後に絶滅してしまいました。現在も生息の可能性があるのは高知県南西部だけですが、最近その姿は全く目撃されていません。

日本の最後の生息地であった高知県と愛媛県では、1945～1983年の39年間に海岸で網にかかり溺れ死んだりしたカワウソが140頭程が捕獲されています。魚網の事故に加え、農業や家庭排水等で水質が悪くなったり、海岸や河川の工事により隠れ場やエサの魚が少なくなったことが、絶滅に近づいた原因だと考えられています。富山県の平野部の河川はコンクリートで固められているところが多く、環境が変わってしまいましたから、カワウソのような大型の水辺の動物がすめる場所はほとんど残っていないと言えます。

図2 富山県の明治時代のカワウソの毛皮の生産量

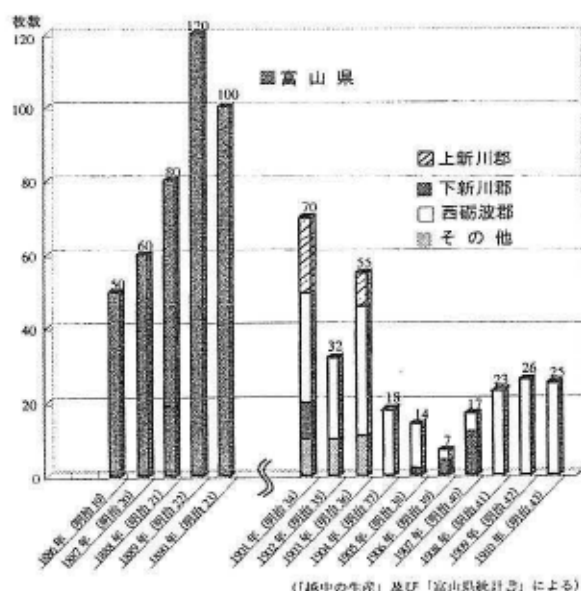


図3 カワウソの捕獲頭数
（1923～1927年）
（町田、1997より作図）



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 (TEL. 076-491-2123)

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

平成12年6月1日